

第一学羽白社 標準現代文

経験の教えについて

森本哲郎

人は何より、経験に学ぶ。しかし、経験をどのように生かすか、その学び方次第で、それぞれの人生は大きく変わる。だから、経験そのものが貴重なのではなく、そこから何を、どのように学ぶか、が肝要なのだ。

経験とは、何も自分の経験だけに限らない。「前車の覆るは後車の戒め」と中国の故言にあり、「人のふり見て我がふり直せ」と日本のことわざにもある。それを動物の姿に託して、子供にもわかるように説いた「哲人」こそ、古代ギリシアの寓話作家アイソポス、すなわち、イソップの名で知られる不思議な人物であった。不思議な人物と言ったが、それは、これほど有名な存在にかかわらず、彼の正体が一向に定かでないからである。本当にいたのかどうかさえ、はっきりしていない。しかし、いずれにしても、イソップほど世界の人々に、生き方の知恵を授

①前車の覆るは後車の戒め 昔の人の失敗は今の人の戒めになるというたとえ。「漢書」賈誼伝にある言葉。

②アイソポス Aesopos (ギリシア語)。イソップは英語名 (Etiop)。



イソップ(ベラスケス(1599-1660)筆)
プラド美術館蔵

けてくれた人物はいない。その何よりの証拠は、『イソップ物語』を持たない国はないほど、彼の寓話が現代に至るまで愛読され続けてきたという事実である。二千数百年も前の古代ギリシアに生きた人間の残した「教訓」が、洋の東西を問わず、古今を通じて、少しも人気を失っていないという事実は、彼の「知恵」がいかに普遍性を持つているかを証して余りある。

イソップの残した数多くの寓話から、人はそれぞれに教訓を読み取ることができ、物語全体を通して彼が説いたのは、経験を生かす知恵と言っている。ここに語られているのは、ほとんどが、みじめで、愚かな失敗譚である。イソップ

は、さまざまなく、動物に託して列挙し、こうした経験に学べ、と教えているのだ。この意味で、私は『イソップ物語』を代表するのは、「獅子の分け前」として知られている有名な話だと思ふ。

改めて紹介するまでもないが、こんな寓話である。

——ライオンとロバが狩りに出かけました。獲物が手に入ると、ライオンはそれを三つに分けて、こう言いました。「まず、この一つはわしがもらう。わしは百獣の王だからな。もう一つも、わしがおまえと協力して働いたのだから、わしが取る。さて、残りの一つだが、もし、おまえが逃げないというなら、こいつはおまえに不幸をもたらすことになるだろう。」

この話は、とイソップは、こう「教訓」を垂れる。

「何事につけても、自分の力量を十分に自覚して、自分より強い者につき合ったり、協力したりしないほうがいいということを明らかにしています。」

同工の寓話だが、もう一つ、彼はもつとはつきり、生き方の知恵を教示している。

——ある日、ライオンがロバとキツネを誘って罠にかけました。たくさん

の獲物があつたので、ライオンはロバに、それを分けるように命じました。ロバは苦心して三等分し、どうぞ、おあがりください、と言いました。すると、ライオンは怒ってロバに襲いかかり、食い殺してしまいました。それからキツネに向かって、今度はおまえが分けてみる、と命じました。そこでキツネは大半をライオンの分として差し出し、残りのわずかを取つたので、ライオンが、「ほう、誰がおまえにこんな分け方を教えたのかね。」とききま

と、キツネはこう答えました。

「ロバの災難です。」

そして、イソップは、これには次のような「教訓」をつけ加えているのである。

「この話は、人間は他人の不幸を見て賢くなる、ということを明らかにしています。」

以上、二つの寓話は、「獅子の分け前」という言葉が示しているように、日本では、強者が弱者を働かせて、その成果を独り占めしてしまつたとえとして解されているようである。たしかに、そうした諷刺がここにこめられている。すなわち、強者は力にものを言わせて、どんな横暴、勝手な振る舞いもできるのだ、という

非道をなじったもの、というわけである。

しかし、イソップが、こうした話を語りながら、いつも頭に置いていたのは、ことに後者の「教訓」にあるように、経験に学べ、ということのように思われる。むろん、この場合の「経験」とは、自分自身のそれではなく、他人の、つまり、ロバの気の毒な身の破滅であるが、経験を生かす、とは、何も自分の経験だけに限らない、他人の経験からも十分に学ぶことができる、とイソップは教えているのである。

古代の中国人は、それを「他山の石」と言った。『詩経』^③に取められているこの言葉の意味は、よその山の粗悪な石でも、自分の持つている玉を磨くのに役に立つ、ということであり、どんな些細な出来事、自分には全く関係ないと思われるような他人の経験からも、処世に役立つ、生き方の参考になるヒントは、いくらでも取り出すことができる、という教えである。

いや、生きる知恵とは、それ以外にないのだ。

だが、人間は他人の経験どころか、自分の苦い体験でさえ、なかなか生かすことができない。よほど痛い目にあわない限り、経験のほとんどを忘却の淵へ投げ

込んでしまうのである。そこでイソップは、次から次へと、手ひどい目にあつた動物たちの姿を語って聞かせる。成功したケースよりも、失敗し、みじめな結果に終わる事例をつきつけるほうが、経験を生かすうえで、はるかに効果的だからである。『イソップ物語』は、動物たちが失敗によって、こうならないように、と身をもって戒める、生き方のカタログと言ってもいいだろう。

では、なぜ、人間は容易に経験に学ぶことができないのであろうか。

イソップはその秘密も、寓話によって、巧みに描き出している。身のほどを知らぬ動物たちのさまざまな末路だ。古代ギリシアにおいて、神託の聖地とされていたデルポイの神殿には「汝自身を知れ」という言葉が掲げられていた。この言葉こそ、ギリシア人のこの上ない英知と言つていいだろう。自分を正しく認識すること、古代ギリシア人は、それを何より、生き方の根底に据えたのである。ソクラテスが、この命題を彼の哲学の原点としたことは、よく知られている。

『寓話のソクラテス』と言われるイソップも、この言葉を生き方の指針とした。だからこそ、あの『イソップ物語』が生まれたのである。「イソップ寓話集」とは、自分を知らざる者の悲喜劇、と言つてもよい。己を知らなければ、どうして経験

③『詩経』 中国最古の詩集。孔子(前五五一-前四七九)の編とされる。

④ 成功したケースよりも……はるかに効果的なのはなぜか。

④ 神託 神のお告げ。

⑤ デルポイ ギリシアの古都。

⑥ ソクラテス Socrates (前四七〇-前三九九)、古代ギリシアの哲学者。

